



東京YMCA

2016 12月号

発行所 公益財団法人東京YMCA 発行人 廣田光司
135-0016 東京都江東区東陽2-2-20 電話 03-3615-5562

URL <http://tokyo.ymca.or.jp>

東京YMCAの使命

東京YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

Merry Christmas



窓辺のツリー

<寄稿>

かんばやし じゅんいちろう
上林 順一郎 牧師

日本キリスト教団 江古田教会牧師。著書に『なろうとして、なれない時』(社会思想社)、『引き算で生きてみませんか』(YMCA同盟出版部)他多数。『YMCAスタディシリーズ』⑩私たちの使命』を執筆するなど長年にわたりYMCAを指導くださっている。



街を彩るイルミネーション、パーティー、プレゼント。にぎやかで楽しいクリスマス。でも、もともとのクリスマスは、貧しい人、弱い人、悲しんでいる人たちのところへ来た「神さまからのプレゼント」でした。――長年YMCAをご指導いただいている上林順一郎牧師のクリスマスメッセージをお届けします。誰もが皆、心温かなクリスマスをお過ごしませうように――。



クリスマスが間近に迫ったある日の夕方、ガンの手術のために入院していた一人の女性を見舞いました。手術を目前にしてさぞ落ち込んでいるだろうと想像しつつ、ドアをノックして病室の中に足を踏み入れました。とたんベッドの上から「センセイ、今年も神さまからクリスマス・プレゼントをもらっちゃったよ!」と、予想外の明るい声が飛んできました。「クリスマス・プレゼント?」部屋を見渡してもクリスマス・プレゼントらしい物はなにも見当たりません。クリスマスらしいものと言え、部屋の窓辺に小さな

贈り物

その瞬間、数年前のクリスマスの出来事が思い出されました。その年のクリスマス近く、自宅近くの吉祥寺の街へ自転車で買い物に出かけた彼女は、突然横から飛び出してきた高校生の自転車にぶつけられ、路上にたまたまきつていました。すぐに救急車で病院に運ばれましたが、ケガは予想以上に大きく、診察した医師は「多分、負傷した右足は以前と同じようには動かないだろう」と言いました。とても活発で、

↑江東YMCA幼稚園の保育者たちが、羊毛で製作したクリスマス・クリップ。毎年、各保育室に飾られます。

We build strong kids, strong families, strong communities. YMCAは、たくましい子どもたち、家族の強い絆、支えあう地域社会を築きます。

水泳や山登りが好きで、教会ではゲームで飛んだり跳ねたり、多くの子どもたちを遊ばせてくれていました。その彼女の足が今までのように動かない! きっと悲しんでいることだろうと思いが、入院中の彼女を見舞ったのです。ベッドの上で横たわっていた彼女は開口一番、「センセイ、今年はいつもと違うクリスマス・プレゼントをもらっちゃった!」と、ギブスをつけた右足を指差したものでした。「それがどうしてクリスマス・プレゼントなの?」と、不審がる私に「この病院には病気がけがで苦しんでいる人たちがたくさんいる。今まで病気があったことがなかった私が、足をけがして初めて病気がけがで苦しんでいる人たちの気持ちが少しわかるようになった気がするの。それが神さまが私にくださった今年のクリスマス・プレゼント!」

友という字は?

戦後しばらくして彼女は夫と共に宣教師として日本に来ました。日本で伝道する宣教師たちの一番の困難は日本語の習得でした。特に漢字は難しく、その読み書きや意味を学ぶのに苦労するのです。しかし、彼女はスマートで想像力の豊かな人でした。彼女が漢字を勉強する方法はイメージで覚えるということでした。

窓辺のクリスマス・ツリー

ガンが発見された時はすでに手遅れで、手術をしても余命は一年と宣告されていました。手術の思いやりを持つことができた人だったので、その年のクリスマス、彼女の「神さまからのプレゼント」は病気のため苦しみや悩み、不安の中にあ

た。たとえば、最初に学んだ漢字の一つに「友」がありました。これをどのようにイメージしたかと言えば、「友」の字は人が十字架を担っている姿に見えたというのです。そう言われればそのように見えなくもありません。彼女はすぐにその意味も学んだのです。隣人の十字架を担いで一緒に歩く人、それが「友」(フレンド)なのだ。彼女たち夫婦の日本での生活は質素でした。サッカーには夏と冬用のスーツが二、三着ずつくらいしかありませんでした。それでもいつも朗らかで、誰にでも親切で、誰かが困っているとすぐ駆けつけ、慰め、祈る人でした。ですから、日本ではたくさん友人がいました。他人の十字架をよるこんで背負っていきこうとした「友」として生きていたからです。さて、ここでクイズです。この「友」という漢字の中に、五つの文字からなる言葉が隠されています。どういう言葉でしょうか? ヒントは、カタカナです。*

彼女の名前はタッド・レーガン、医師の予告通り一年後のクリスマス前にアメリカの自宅で家族に見守られながら、55歳の早すぎる生涯を終えました。「また逢いましょう」との短い言葉を残して……今年、クリスマス、天国の窓辺では彼女の小さなクリスマス・ツリーが美しく輝いていることでしょう。「今年のクリスマス・プレゼントは何だったの?」と、私たちに問いかけるように。

「クリスマス」です。*クイズの答えは「クリスマス」です。カク入マス 硬派で売るタレント日は料理好き。テレビで離婚の危機について語る時の話が泣かせた。仕上げに塩を振ったが塩の味がしない。愛妻がビンに砂糖を入れていたのだ。見掛けは同じでも塩ではなかった▼似たようなハナシが聖書にある。塩が効き目をなくしたら、どうして塩の味を出せるだろうか。もう一つ、当然だが、塩はその形のままで味を出せない。塩は溶けて形を失って初めてその価値がある。まあこれは砂糖も同じだが▼YMCAのことを思い出して、移り変わる社会にあつて、YMCAがその価値を表すには、形を失わなければならないか。東京YMCAの始まりは、青年にキリスト教を伝道しようとの熱意にあふれたものであった。世界的にも、当時各国のYMCAがモットーとしていたものは「パリ基準」だった。本紙にも毎月掲げられていた。今は「東京YMCAの使命」が掲げられている。この二つを讀み比べてみると、その間の違いに思いは深い▼形を失ってこそ価値を示せることも事実ではあろうが、それにはまず示すべき「価値」を常に皆が確認していないと、形そのものに「価値」がないことになさ気付かないようになると思う。(広報委員長 郡山千里)

赤三角

硬派で売るタレント日は料理好き。テレビで離婚の危機について語る時の話が泣かせた。仕上げに塩を振ったが塩の味がしない。愛妻がビンに砂糖を入れていたのだ。見掛けは同じでも塩ではなかった▼似たようなハナシが聖書にある。塩が効き目をなくしたら、どうして塩の味を出せるだろうか。もう一つ、当然だが、塩はその形のままで味を出せない。塩は溶けて形を失って初めてその価値がある。まあこれは砂糖も同じだが▼YMCAのことを思い出して、移り変わる社会にあつて、YMCAがその価値を表すには、形を失わなければならないか。東京YMCAの始まりは、青年にキリスト教を伝道しようとの熱意にあふれたものであった。世界的にも、当時各国のYMCAがモットーとしていたものは「パリ基準」だった。本紙にも毎月掲げられていた。今は「東京YMCAの使命」が掲げられている。この二つを讀み比べてみると、その間の違いに思いは深い▼形を失ってこそ価値を示せることも事実ではあろうが、それにはまず示すべき「価値」を常に皆が確認していないと、形そのものに「価値」がないことになさ気付かないようになると思う。(広報委員長 郡山千里)

世界YMCA/YWCA合同祈禱週

2016年度テーマ

“誰も置き去りにしない”

合同祈禱会では、日本基督教団王子教会の大久保正禎牧師を招き、「ひとりを探しにいかないか？」と題してお話いただきました。大久保牧師は、聖書『マタイによる福音書』第18章から、九十九匹の羊を置いて一匹の迷子の羊を探しに行く

会員/ミッション委員

東矢 高明

全世界のYMCAとYWCAによる「世界YMCA/YWCA合同祈禱週」が、今年も11月13日から一週間行われました。今回のテーマは「誰も置き去りにしない」。東京YMCAは11月17日、在日本韓国YMCAおよび東京YWCAと共に祈禱会を開催。在日本韓国YMCAを会場に、礼拝および交流のひとときを持ちました。

話しを引用し、「今の社会は分断と憎悪に満ち、自分が生き延びるために、誰かを置き去りにしてはいけません。この聖句を語りました。この聖句は、迷い出て一人になった私です。イエスは必ず探してくださる、そこに慰めがあると解釈する

ことが多くありますが、しかし大久保牧師は「イエスは、この箇所、あなた方はどう思うのか？」と九十九匹に問いかけている」と言います。「私たちは、九十九匹を放つて一匹を探すと、宗教上のことであって、現実社会の話ではないと考えてないでしょうか。そして何か大切なものを置き去りにして、九十九匹になっていないでしょうか。」

本日の現実、九十九匹と一匹が分かれて生きているのではありません。一人ひとりが人と出会って、顔の見える積み重ねで生きていくのは、決して容易なことではありません。イエス

と共に一人を探しに行く者でありたい、イエスの呼びかけに働く者でありたい。そんなメッセージをいただきました。

私がいたベイト・サフールは、「天の御使いが、羊飼いたちに救い主のご降誕を告げた」という場所です。イエスの両親・ヨセフとマリアと違い、羊飼いはローマ帝国の人口調査の対象で、置かれた者たちでした。

しかし、神はそのような人たちにこそ、メッセージを送られたのです。私たちは問題から目を背け、沈黙して、九十九匹より少ないのではなく、一匹を探しにいくように「人々を刺戟し、変化を促すような存在になる」、すなわちピースメイカー、「平和をつくりだす」働き人にならなければと感じました。



会員、学生、職員など31人が山手コミュニティセンターに集まり、貧困について学びました。

山手コミュニティセンターで勉強会 “子どもの貧困”にYMCAができることは

「子どもの貧困」といって聞かれるような言葉が、いろいろなところで聞かれるようになった。生活困窮、社会的孤独、格差社会など多くの問題が深刻化している現代社会において、生きづらさを感じている子どもたちは少なくありません。そんな課題にどう取り組むかを考えるため、山手コミュニティセンターは11月6日、講演会「子どもの貧困を考える」を開催しました。

参加者は、会員、リーダーOB、学生(学生YMCA、山手学舎生、東京YMCA専門高校生、高等学院生徒)、職員、一般参加者など31名。新宿区の路上生活者支援をしている「スープの会」の世話人・後藤浩二氏を講師に招き、貧困問題について学びました。

講演の前半は、貧困概念の変遷について説明を聞きました。人間らしい生活水準が保たれない「絶対的貧困」と社会水準との比較から定められる「相対的貧困」。不安定な雇用などにより社会で活躍できないようにされる「社会的排除」。また、昨今、全国で展開されている子ども食堂や、NHKで放映された「貧困女子高生」へのバッシング、若者支援(学習支援や就労支援)など、最近の事例からも貧困の本質の一片を説明していただきました。

後半の質疑応答では、「貧困問題にボランティアが関わることにはあるか?」など熱い質問がたぐさ寄せられました。印象深かったのは、「援助者」としてではなく、「当事者」として関わっている」という後藤さんの言葉です。地域住民として関わり、目を向けるという姿勢が大切であり、個人の問題としてではなく地域の課題として取り組むというメッセージ。

では、どうすれば我々は子どもたちからのSOSが拾えるか? その一つの方法として「居場所作り」があげられました。子ども食堂は食べさせるだけでなく、寺子屋は勉強を教えるだけでなく、居場所として子どもたちが自分を語れる場となるのが本場の意味だと感じました。

YMCAは子どもたちにとって「居場所」となるか、貧しくても軽んじられることはないという自尊心と他者への信頼感をもち、アイデンティティを形成できる場を提供できるか。地域と手をつなぎながらこの問題に取り組んでいきたいと思えます。

熊本通信

— 現地に派遣中のスタッフより —



↑「支え合いセンター」のスタッフ

熊本YMCAは11月から「木山仮設住宅支え合いセンター」を委託運営し、益城町の木山地区と御船町の木倉地区での総合相談窓口や身守り活動のほか、仮設団地内の集会所を会場にしたコミュニティ作りなどを行なっています。「よかきやまハウス」という居場所プログラムや、住民同士の民謡の会、町主催の介護予防体操など、さまざまなイベントのコーディネートを行なっており、11月には関西学院大学の学生やジャズバンドの皆さん等もボランティアで来てくれました。集会所は広くはないですが、一緒に何かをやって過ごしていただけるボランティアは大歓迎です。

ら補助してもらって“みなし仮設”の方もいます。

熊本YMCAは、こうしたご家庭の訪問活動もしている子どもたちを対象にYMCAのキャンプや水泳などの参加費減免を実施し、大変好評をいただいています。この原資には皆さまからの募金があてられています。

私自身は3か月間の派遣を終えて12月に東京に帰任しましたが、現地はまだまだ安定した生活には程遠い状況です。引き続きのご支援をお願いいたします。

(東京YMCA 秋田正人)

●「木山支え合いセンター」の活動は以下をご覧ください
<https://www.facebook.com/kiyama.sasaeai/>

開校3年目 高等学院 初の文化祭

→生徒が作成した募集用ポスター



11月12日、東京YMCA高等学院初のミニ文化祭『オートタムフェスタ』が行われました。開校3年目となり、生徒から「発表したり、文化祭みたいなことがやりたい!」という声があがり企画したイベントです。はじめてのイベントだったため、「みんなが楽しんでくれるものは何だろう?」と、実行委員会を開いて、一から考えました。「お化け屋敷もカフェもどっちも捨てがたいな・・・じゃあ、”おばけカフェ”にしよう!」などみんなでやりたいことと、実際にできることを考えていきました。

当日は、在校生の家族や友だち、卒業生や卒業生の保護者、学校見学も兼ねてきてくれた中学生、そしてYMCAの英語クラスやプールに通っている子などあわせて100人弱の人が遊びに来られました。

前半は、生徒たちがそれぞれのブース(食べ物・工作・ゲーム・おばけカフェ)に分かれてお店の担当をしました。そして生徒だけではなく、保護者の会もブースを出し、盛り上げてもらいました。

後半はステージ発表を行いました。ダンス、歌、パペットショー、音楽大学に進学した卒業生のミニコンサートもあり、最後はキャンプソングをみんなで歌いました。小さな学校だけれども、たくさんのつながりを感じられるイベントとなりました。

生徒からは、「準備は大変だったけど終わった時の達成感は気持ちよかった。一つ殻を破れた気がする」、保護者からは「日頃、温かい雰囲気の中で過ごしている様子が伝わってきました」、「大きなお友達も、小さなお友達もたくさん笑って、食べて、踊りました!すべてに感謝!」との感想がありました。一から考えたり、練習や準備をする中で、仲間や自分自身の新たな一面を発見できたり、新しい関わりが増えたこともこのイベントの大きな意義だと感じました。これからも一人ひとりがさまざまなかたちで輝ける場、たくさんの人とのつながりを大切にする場を作っていきたいなと思います。(高等学院教員 鳥海真理江)

■アジアドッジボール選手権大会優勝

社会体育・保育専門学校生2人が 日本代表として出場



野房左近さん(写真右)と篠原謙生さん(同左)

香港で11月26・27日に開催された「アジアドッジボール選手権大会」に、東京YMCA社会体育・保育専門学校2年生の野房左近さんと1年生の篠原謙生さんの2人が日本代表選手として出場。香港・台湾チームを破り、優勝しました。

2人は小学生の頃からそれぞれ地元のチームで練習を続け、数々の試合経験を重ねて今年、日本ドッジボール協会にエントリー。全国の選手たちと共に強化合宿や実技試験、面接などを受け、日本代表20人の一員に選ばれました。

公式ドッジボールは、内野9人と外野1人の10人制。コートは1チーム10m四方と狭い上、3辺を相手チームに囲まれているため、プレーヤー同士の連携が欠かせません。敵のボールを避けるため低い姿勢を保ちつつ、味方のパスの効率をよくするため壁のように横1列に並び、さらにボールの動きに合わせて機敏にポジションを変えていきます。試合時間は5分間。一瞬のすきも許されない、緊迫感のあるスポーツです。

「ドッジボールは、誰もがやったことのある身近な遊びだけれど、とても奥深いスポーツ。持久力、瞬発力、筋力、判断力など、総合的な運動能力が身に付くのでたくさんの子もたちに勧めたい」と野房さん。今後は普及活動もしていきたいと、笑顔いっぱいに語ってくれました。(広報室)



「一般財団法人りそな未来財団」と東京YMCAが協働し、ひとり親家庭の親子を対象とした「りそなDAYキャンプ」を開催しました。りそな未来財団は、子どもの貧困問題や母子家庭支援に取り組むため「りそなグループ」が設立した財団法人で、今年初めて、大阪と東京の2カ所のYMCAと協働プログラムを行ないました。

「りそな未来財団」と東京YMCAが協働し、ひとり親家庭の親子を対象とした「りそなDAYキャンプ」を開催しました。りそな未来財団は、子どもの貧困問題や母子家庭支援に取り組むため「りそなグループ」が設立した財団法人で、今年初めて、大阪と東京の2カ所のYMCAと協働プログラムを行ないました。

「りそな未来財団」と初の協働プログラム ひとり親家庭を対象に「りそなDAYキャンプ」

「りそな未来財団」と東京YMCAが協働し、ひとり親家庭の親子を対象とした「りそなDAYキャンプ」を開催しました。りそな未来財団は、子どもの貧困問題や母子家庭支援に取り組むため「りそなグループ」が設立した財団法人で、今年初めて、大阪と東京の2カ所のYMCAと協働プログラムを行ないました。



「りそな未来財団」と東京YMCAが協働し、ひとり親家庭の親子を対象とした「りそなDAYキャンプ」を開催しました。りそな未来財団は、子どもの貧困問題や母子家庭支援に取り組むため「りそなグループ」が設立した財団法人で、今年初めて、大阪と東京の2カ所のYMCAと協働プログラムを行ないました。

「りそな未来財団」と東京YMCAが協働し、ひとり親家庭の親子を対象とした「りそなDAYキャンプ」を開催しました。りそな未来財団は、子どもの貧困問題や母子家庭支援に取り組むため「りそなグループ」が設立した財団法人で、今年初めて、大阪と東京の2カ所のYMCAと協働プログラムを行ないました。

東京YMCAが運営する保育園や学童クラブなど12の施設から130人の保育士等が集まって11月26日、研修を行いました。保育事業部では毎年2回研修を行っており、今春には、玉川大学准教授の大豆田啓友(おおまけうだ・ひるとも)先生から「保育・教育の本質、倉橋惣三の保育から学ぶ実践」について基調講演をいただきました。大豆田先生から、子どもは自発的に「遊びこむ」中で成長すると学んだことから、その後各園で「遊びこむ」を実践。今回はその実践報告を4園が発表し、また他の園も展示報告をするなどして、理解を深めました。東陽町YMCA保育園は、おもちゃではなく大量の空き箱などを用意して子どもの様子を観察。子どもたちは試行錯誤しながら遊びこんでいき、2歳児がトイレットペーパーの芯をつなぎ合わせて双眼鏡やバッグを作るなど、大人の想像をはるかに超えた豊かな発想力がみられました。他の園からも、「こ遊び」や「友だちとの関わり」などさまざまな事例が報告され、子どもたちが遊びこむことで発揮される力に驚くと共に、各園で活かせるよう、学びを深めることができました。(東陽町YMCA保育園 施設長 矢野久美)

保育職員130人が研修 子どもの遊びを考える

東京YMCAが運営する保育園や学童クラブなど12の施設から130人の保育士等が集まって11月26日、研修を行いました。保育事業部では毎年2回研修を行っており、今春には、玉川大学准教授の大豆田啓友(おおまけうだ・ひるとも)先生から「保育・教育の本質、倉橋惣三の保育から学ぶ実践」について基調講演をいただきました。大豆田先生から、子どもは自発的に「遊びこむ」中で成長すると学んだことから、その後各園で「遊びこむ」を実践。今回はその実践報告を4園が発表し、また他の園も展示報告をするなどして、理解を深めました。東陽町YMCA保育園は、おもちゃではなく大量の空き箱などを用意して子どもの様子を観察。子どもたちは試行錯誤しながら遊びこんでいき、2歳児がトイレットペーパーの芯をつなぎ合わせて双眼鏡やバッグを作るなど、大人の想像をはるかに超えた豊かな発想力がみられました。他の園からも、「こ遊び」や「友だちとの関わり」などさまざまな事例が報告され、子どもたちが遊びこむことで発揮される力に驚くと共に、各園で活かせるよう、学びを深めることができました。(東陽町YMCA保育園 施設長 矢野久美)

「りそな未来財団」と東京YMCAが協働し、ひとり親家庭の親子を対象とした「りそなDAYキャンプ」を開催しました。りそな未来財団は、子どもの貧困問題や母子家庭支援に取り組むため「りそなグループ」が設立した財団法人で、今年初めて、大阪と東京の2カ所のYMCAと協働プログラムを行ないました。

「りそな未来財団」と東京YMCAが協働し、ひとり親家庭の親子を対象とした「りそなDAYキャンプ」を開催しました。りそな未来財団は、子どもの貧困問題や母子家庭支援に取り組むため「りそなグループ」が設立した財団法人で、今年初めて、大阪と東京の2カ所のYMCAと協働プログラムを行ないました。

東京-NY フロストパレー便り

ニューヨークに赴任してちょうど1年が過ぎました。当初は初めてのことが多く、深く考える余裕もありませんでしたが、最近少しずつ、日米における文化の違い、比較について考える機会も増えてきました。フロストパレーYMCAでは、スタッフ宛に時折、人事部から採用情報が流れてきます。スタッフの知人、友人に周知するためとも考えられますが、フロストパレー内でもスタッフが度々異動していることを踏まえると、スタッフに向けられた採用情報のようにも感じます。人事制度、雇用慣行について、日本とアメリカでは大きな違いがあることに気付きます。日本では、「終身雇用」「年功序列」といった言葉に表されるように、新規学卒者を定期的に採用し、長期に渡って同じ企業に勤務することを前提とした人事管理、教育が行われます。同一企業での長期雇用です。企業内で様々な業務を経験します。いつの間にか、自分がやりたかった業務ではなくなるとして、生活の糧のために働きます。いわゆる「就社」です。一方アメリカでは、個人は特定の職業上の能力を身につけ、一つの企業に依存することなく転職を繰り返します。自由と独立の名の下に成立したアメリカらしく、辞める自由もあれば解雇される自由もあります。その分、転職市場が非常に発展しているのです。スキルさえあれば新たな職探しは比較的容易と言われていました。フロストパレーでもスタッフの出入りは多く、退職は珍しくありません。今までの働きに感謝し、YMCAで養ったスキルを社会のために使ってほしいと、エールと共に送り出します。フロストパレー内でも、役割への希望、私生活上の変化など本人の意思によって別のポジションへの申し込みがされます。自分は何に向かって仕事をしているのか。改めて自分の仕事、YMCAについて考えるときを持つことができます。(在フロストパレーYMCA 鳩山徹郎)

「不寛容の時代」に想う

「兄弟たちよ。あなたがたにお勧めする。今日世相を表現する。不寛容の時代」と言われ、弱きを助け、すべての人に對して寛容でありなさい。だれも悪をもつて悪に報いようように心がけ、お互に、またみんなに對して、いつも善を追求めなさい。いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスが、神があなたに求めておられることである」(新約聖書「テサロニケ第一の」) 誰か置き去りにしないで、感謝しなさい。現代社会では多くの人が置き去りにされ、多くの人が不機嫌な顔を付けている。幸いなるのでしよう。他人を許さない集まりは、他人を許さない集まり。それは人間の罪、幸いなるのでしよう。今年もクリスマスが近づいてきました。神様が私たちにそのことを気付かせるためにイエス・キリストを派遣してくれました。クリスマスおめでとうござります。(総主事 廣田光司)

野房左近さん(写真右)と篠原謙生さん(同左)

「りそな未来財団」と東京YMCAが協働し、ひとり親家庭の親子を対象とした「りそなDAYキャンプ」を開催しました。りそな未来財団は、子どもの貧困問題や母子家庭支援に取り組むため「りそなグループ」が設立した財団法人で、今年初めて、大阪と東京の2カ所のYMCAと協働プログラムを行ないました。